

應劭『風俗通義』祀典篇訳注稿（下）

道家
春代

本稿は、後漢應劭『風俗通義』第八、祀典篇の訳注である。

ことができなかった。

- （上）は『名古屋大學中國語學文學論集』第二十九輯（二〇一五年十二月）に掲載した。本文には原則として吳樹平『風俗通義校釋』（天津人民出版社、一九八〇年）を用い、王利器『風俗通義校注』（中華書局、一九八一年）、香港中文大學中國文化研究所『風俗通義逐字索引』（香港・商務印書館、一九九六年）、『風俗通義全訳』（貴州人民出版社、一九九八年）、及び季嘉玲「風俗通義校注」（『臺灣師範大學研究所集刊』第二十一號、一九七七年）を参照した。残念ながら朱季海『風俗通義校箋』（學術書林、一九九六年）、は入手できず、見る

目次

- | | |
|----|--------|
| 9 | 雄雞 |
| 10 | 殺狗磔邑四門 |
| 11 | 媵 |
| 12 | 臘 |
| 13 | 祖 |
| 14 | 禊 |
| 15 | 司命 |

9 雄雞

俗説，雞鳴將旦，爲人起居。門亦昏閉晨開，扞難守固。禮貴報功，故門戶用雞也。

『青史子』書(1)説，「雞者，東方之牲也(2)。歲終更始，辨秩東作(3)，萬物觸戶而出(4)，故以雞祀祭也。」

太史丞(5)鄧平説(6)，「臘者，所以迎刑送德(7)也。大寒至，常恐陰勝，故以戌日臘。戌者，溫氣(8)也，用其氣日(9)殺雞以謝刑德。雄著門，雌著戶，以和陰陽，調寒配水(10)，節風雨也。」

謹按，『春秋左氏傳』(11)「周大夫賓孟適郊，見雄雞自斷其尾，歸以告景王曰『憚其爲犧也。』」『山海經』曰「祠鬼神皆以雄雞(12)」。魯郊祀常以丹雞，祝曰「以斯軫音赤羽，去魯侯之咎(13)」。今人卒得鬼刺非悟(14)，殺雄雞以傳其心上(15)。病賊風者作雞散治之，東門雞頭可以治蠱(16)。由此言之，雞主以禦死辟惡也。

〔注〕

(1)『漢書』藝文志小說家「青史子五十七篇。古史官記事也。」「隋書」

經籍志三小說「燕太子一卷。：梁有青史子一卷。」

(2)『新書』胎教「然後，爲太子懸弧之禮義。東方之弧以梧，梧者，東方之草，春木也。其牲以雞，雞者，東方之牲也。」馬國翰『玉函山房輯佚書』は『青史子』に『新書』と『大戴禮記』の引用文のみを集録し「歲終」以下の文を輯録していない。王仁俊『玉函山房輯佚書續編』は『風俗通義』を出処として、「祀祭也」までを『青史子』の文として輯録している。

(3)『尚書』堯典「寅賓出日，平秩東作。」孔安國傳「寅，敬。賓，導。秩，序也。歲起於東而始就耕，謂之東作。東方之官，敬導出日，平均次序東作之事，以務農也。」「史記」五帝本紀「敬道日出，便程東作。」

(4)『禮記』月令「仲春之月，：蟄蟲咸動，啓戶始出。」疏「戸謂穴也，謂發所蟄之穴。」

(5)『後漢書』百官志二「太子令一人，六百石。本注曰掌天時、星曆。凡歲將終，奏新年曆。凡國祭祀、喪、娶之事，掌奏良日及時節禁忌。凡國有瑞應、災異，掌記之。丞一人。」

(6)『漢書』律曆志上「(太初曆制定をめぐって)乃詔遷用鄧平所造八十一分律曆，罷廢尤疏遠者十七家，復使校曆律昏明。宦者淳于陵渠復覆太初曆晦朔弦望，皆最密，日月如合璧，五星如連珠。陵渠奏

狀、遂用鄧平曆、以平爲太子丞。」

(7) 吳樹平、王利器共に盧文弨『羣書拾補』が蔡邕「獨斷」に拠り「迎刑送德」を「送刑德」に作るべきというのに従う。『太平御覽』

三三三「蔡邕獨斷曰『臘者歲終大祭、縱吏民宴飲、非迎氣故。但送不迎也。』」

(8) 王利器、『灌畦暇語』等により「土氣」に作る。『灌畦暇語』「風俗相傳、臘日磔鷄、立春日磔狗。大史丞鄧平說、臘者所以迎刑送德也。大寒至、常恐陰勝陽。故以戌日臘。戌者土氣也。用其日殺雞、以謝德。雄着門、雌着戶、以和陰陽、調寒暑、節風雨也。」これに従う。

(9) 王利器、『灌畦暇語』に従い「氣」を省く。注(8)参照。これに従う。

(10) 吳樹平、王利器共に孫詒讓『札迻』の「調寒暑配水旱」とする説を引くも従わず、「配水」を「暑」の誤りとする。これに従う。

(11) 『春秋左氏傳』昭公二十二年「賓孟適郊、見雄雞自斷其尾、問之侍者、曰『自憚其犧也。』」遽歸告王、且曰『雞其憚爲人用乎。人異於是。犧者實用人、人犧實難、己犧何害。』王弗應。」

(12) 『山海經』西山經「其十輩神者、其祠之、毛一雄雞。」北山經「其神皆人面蛇身。其祠之、毛用一雄雞。」

(13) 『說文解字』「鷄、雞肥翰音者也。从鳥執聲。魯郊以丹雞、祝曰

以斯翰音赤羽、去魯侯之咎。」段注「曲禮『凡祭宗廟之禮、雞曰翰音。』注『翰猶長也。』正義曰『雞肥則其鳴聲長也。』」『禮記』曲禮下「凡祭宗廟之禮、……雞曰翰音。」

(14) 『史記』魏其武安侯列傳「魏其良久乃聞、聞即恚、病非、不食欲死。」索隱「非音肥、又音扶味反、風病也。」吳樹平、「悟」は「忤」に通じるという。

(15) 『太平御覽』八八四「志怪曰『夏侯弘忽行江陵、逢一大鬼、投弓戟急走、小鬼數百從之。弘畏懼、下路避之。大鬼過後、捉一小鬼、問此是何物。曰廣州大殺。弘曰以此矛戟何爲。曰以此殺人、若中心腹者輒死、中餘處不至於死。弘曰治此病者有方不。鬼曰殺烏雞薄心即差。弘曰今欲行何。鬼曰當荆楊二州。爾時此二州皆行心腹病、略無不死者。弘在荊州、教人殺烏雞薄之、十得八九。今中惡用烏雞、自弘之由也。』」

(16) 『說文解字』「蠱、腹中蟲也。春秋傳曰皿蟲爲蠱。晦淫之所生也。鼻磔死之鬼、亦爲蠱。」段注「中蟲、皆讀去聲。……中蟲者、謂腹內中蟲食之毒也。自外而入、故曰中。自內而蝕、故曰蠱。」

〔訳〕
俗説に次のようにいう。鶏は夜明けが近づくと鳴き、人び

とはそれを合図にして一日の生活を始める。門も夕暮れに閉じられ、(鶏の合図によって) 朝開けられるが、それは災厄の侵入を防ぎ堅守するものである。礼は功績に報いることを重んじる。そこで門戸の功に報いるために、その祀りには鶏を用いる。

古の史官の書『青史子』にいう、「鶏は東方を祀る牲である。一年が終わり年が改まると、人びとは野に出て春の耕作を始める。また冬ごもりしていた万物は戸を開いて出てくる。そこで鶏を牲にして春の方角東方の祭祀をするのである。」

武帝の時の太史丞鄧平の説では、「臘祭は刑徳(物を殺す陰気の徳)を送る祭である。この時節には大寒がやってきて、常に陰気が陽気に勝るのを恐れるので、戌の日に臘祭をする。戌は土気である。そこで戌の日に鶏(東方、陽気の牲)を殺して刑徳に感謝する。雄鶏を門につるし、雌鶏を戸につるして、陰陽を中和させ、寒暑を調節し、風雨をおさえるのである」という。(「俗説」『青史子』「鄧平説」三説はこのように異なっている。)

謹んで考察いたします。『春秋左氏傳』昭公二十二年の条に「周の大夫賓孟は郊外に出たとき雄鶏が自分の尾羽を食いち

ぎっているのを見た。帰って景王にこのことを告げ『自分が祭りの犠牲にされるのを恐れて美しい尾羽をむしっているです』といった」とある。『山海經』に「鬼神を祠で祀るにはみな毛物(鳥獸)の牲として雄鶏を用いる」とある。魯の郊祀では常に赤い鶏が牲として捧げられ、「この美声で美しい赤羽の鶏を捧げますので、どうか魯侯を災難からお守り下さい」と祝詞する。『春秋左氏傳』『山海經』「魯郊祀」によれば、鶏の性は、門戸・東方・陰陽とは関係がなく、上記三説はすべて妥当といえない。

今の人は、にわかには鬼につつかれて風病を發して精神が錯乱すると雄鶏を殺して心臓の上に置いたり、悪い風にあたって病気になるると鶏散という薬で治療したり、東門に鶏の頭をかけて蠱(食中毒)を治したりする。これらのことからみると、鶏には死を禦ぎ悪気をさける力があるのだろう。

10 殺狗磔邑四門

俗説、狗別賓主，善守禦，故著四門，以辟盜賊也(1)。

謹按，月令「九門磔禳，以畢春氣(2)」。蓋天子之城十有二

門，東方三門，生氣之門也。不欲使死物見於生門，故獨於九門殺犬磔。犬者，金畜（3），禳者，却也。抑金使不害春之時所生，令萬物遂成其性。火當受而長之，故曰「以畢春氣」。功成而退，木行終也。『太史公記』「秦德公始殺狗磔邑四門，以禦蠱畜（4）」今人殺白犬，以血題門戶。「正月白犬血辟除不祥」，取法於此也。

〔注〕

（1）『太平御覽』九〇五「風俗通曰『殺狗磔邑四門。俗云狗別賓，善守衛，着以辟惡。』」又曰『太史公記云，秦始皇殺狗磔四門，以禦凶災。今人殺白犬，以血題門戶曰，正月白犬血辟除不祥。』又曰『殺犬磔攘，犬者金畜，攘者却也。抑金使不害也。』『風俗通義』怪神篇「世間多有狗作變怪，朴殺之，以血塗門戶，然衆得咎殃。」『隋書』五行志上「大業元年，雁門百姓間，犬多去其主，羣聚於野，形頓變如狼，而噉噬行人，數年而止。五行傳曰『犬，守禦者也。而今去其主，臣下不附之象。形變爲狼，狼色白，爲主兵之應也。』」『五行傳』は劉向撰『洪範五行傳』

（2）『禮記』月令「季春之月，…命國難，九門磔攘，以畢春氣。」鄭玄注「此難，難陰氣也。陰寒至此不止，害將及人。…氣佚則厲鬼隨而出行。命方相氏帥百隸，索室毆疫以逐之。又磔牲以攘於四方之

神，所以畢止其災也。王居明堂禮曰「季春，出疫于郊，以攘春氣。」（3）月令「孟秋之月，…天子居總章左个，乘戎路，…食麻與犬。」

鄭注「犬，金畜也。」『周禮』春官宗伯「以血祭祭社稷、五祀、五嶽，以狸沈祭山林、川澤，以鬻辜祭四方百物。」鄭注「鬻爲罷。鄭司農云：『罷辜，披磔牲以祭，若今時磔狗祭以止風。』」疏「云若今時磔狗祭以止風者，此舉漢法以況鬻辜爲磔之義。必磔狗止風者，狗屬西方金，金制東方木之風，故用狗止風也。」

（4）『史記』封禪書「秦德公既立，…作伏祠。磔狗邑四門，以禦蠱畜。」秦本紀「德公：二年，初伏，以狗禦蠱。」正義「蠱者，熱毒惡氣爲傷害人，故磔狗以禦之。年表云『初作伏，祠社，磔狗邑四門。』」按，磔，禳也。狗，陽畜也。以狗張磔於郭四門，禳卻熱毒氣也。左傳云「皿蟲爲蠱。」

〔訳〕

俗説に、犬は主人と客をよく見分けし、番犬として家をよく守る、そこでまらの四方の門にはり付け盜賊を遠ざける、という。

謹んで考察いたします。月令に「季春の月、九門に牲を磔にして（陰気による）厄いを禳い、春気を畢える」とある。天子の城には（四方に三門ずつ合わせて）十二門あるが、東

方の三門は生気の門であり、動物の死骸を生気の門に置きたくないので、東の三門を除いた九門だけに犬を殺して磔にし、邪気をはらうのである。犬は金行の家畜であり、禳とは却である。金行を抑えて陰気に春季の正常な運行を邪魔させず、万物を健全に成育させる。そうすれば火行（夏季）はそれを受けて万物をさらに成長させる。それで「春気を畢える」というのである。功成つて退き、木行は終わる。『史記』封禪書に「秦の徳公は初めて狗を殺し、邑の四門に磔け、蠱苗を禦いだ」とある。（門戸を守るといふ俗説は「月令」「史記」の記述と違っている。）今の人が白犬を殺してその血で門戸に『正月白犬の血、不祥を辟除する』と題するのは、これに倣っているであろう。

11 膾

謹按、『韓子』書「山居谷汲者，膾臘而遺水（1）。」楚俗常以十二月祭飲食也（2）。又曰嘗新始殺也，食新曰緇膾（3）。

〔注〕

（1）「遺」字、もと「買」に作る。吳樹平、『韓非子』により改める。

『韓非子』五蠹「夫山居而谷汲者，膾臘而相遺以水。澤居苦水者，買庸而決竇。」王先慎集解「谷水難得，故節以水相遺也。先慎曰說文『膾，楚俗以二月祭飲食也。』『臘，冬至後三戌臘祭百神。』風俗通引『相遺以水』作『買水』。」

（2）『說文解字』「膾，楚俗以二月祭飲食也。从肉婁聲。一曰祈殺食新曰膾。」段注「風俗通作十二月。劉昭引同。與許書二月異。疑十爲衍字。仲遠書多襲用說文也。」王利器、「楚俗」の上に「說文」の二字があるべきとする。これに従う。『拾補』は「十」は衍字ではないとする。

（3）『說文解字』段注「風俗通曰『又曰嘗新始殺食曰緇膾。』劉昭所引如是。『後漢書』禮儀志中「立秋之日，白郊禮畢，始揚威武，斬牲於郊東門，以薦陵廟。其儀……，名曰緇膾。……緇膾之禮，祠先虞，執事告先虞已，烹鮮時，有司告，乃遂巡射牲。獲車畢，有司告事畢。」劉昭注「古今注曰『永平元年六月乙卯，初令百官緇膾，白暮皆霜。』風俗通稱『韓子書山居而谷汲者，膾臘而遺水。楚俗常以十二月祭飲食也。又曰嘗新始殺也。食新曰緇膾。』『後漢書』劉玄劉盆子列傳「張印……等與御史大夫隗囂合謀，欲以立秋日緇膾時共劫更始，俱成前計。」李賢注「前書音義曰『緇，獸。以立秋日祭獸。王者亦此日出獵，用祭宗廟。』冀州北郡以八月朝作飲食爲膾，其俗語曰『膾臘

社伏。』獮音丑于反。臘音婁。』

〔訳〕

(臘祭について) 謹んで考察いたします。『韓非子』五蠹篇に「山に居住して水を谷まで汲みにいく人は、(水が貴重なので) 臘と臘の祭にも水を節約する」とある。『説文解字』に「楚の俗習では常に十二月に飲食の祭をする」とある。「一説に立秋の日に獮に出て初めて得た獲物を供えて食するのを『獮臘』の祭りという」ともある。(このように「臘祭」には二説(二種)ある。)

12 臘

謹按、『禮傳(1)』「夏曰嘉平，殷曰清祀，周曰大蜡，漢改爲臘(2)」。臘者，獵也，言田獵取獸(3)，以祭祀其先祖也(4)。或曰臘者，接也，新故交接，故(5)大祭以報功也。漢家火行，衰於戌，故以戌臘也(6)。

〔注〕

(1)『玉函山房輯佚書』に荀爽『禮傳』を輯佚するが、この文は採っていない。「礼」についての「伝」と解するべきか。

(2) 蔡邕『獨斷』「四代臘之別名，夏曰嘉平，殷曰清祀，周曰大蜡，漢曰臘。」『史記』秦本紀(惠文君)十二年，初臘。』始皇本紀「三十一年十二月，更名臘曰嘉平。」『春秋左氏傳』僖公五年「宮之奇以其族行曰『虞不臘矣。』」杜注「臘，歲終祭衆神之名。」

(3) 吳樹平、王利器ともに『拾補』に従い、「禽獸」に作るべきという。これに従う。

(4) 月令「孟冬之月：是月也，大飲蒸。天子乃祈來年于天宗，大割祠于公社及門閭，臘先祖、五祀。」鄭注「此周禮所謂蜡祭也。天宗謂日月星辰也。大割，大殺羣牲割之也。臘謂以田獵所得禽祭也。」

(5) 「故」字、吳樹平、王利器ともに『拾補』が『太平御覽』等を引いて「狎臘」とするのに従う。『太平御覽』三三三「風俗通曰『夏曰清祀，殷曰嘉平，周曰大蜡，漢曰臘。臘者獵也。因獵取獸以祭先祖，或曰臘，接也。新故交接，狎臘大祭，以報功也。漢火行，衰於戌，故以戌爲臘也。』」

(6) 『獨斷』「臘者歲終大祭，縱吏民宴飲，非迎氣故，但送不迎，正月歲首，亦如臘儀。」

〔訳〕

(臘祭について) 謹んで考察いたします。『禮傳』に「夏では嘉平といい、殷では清祀といい、周では大蜡といい、漢では嘉平といい、殷では清祀といい、周では大蜡といい、漢で

は嘉平といい、殷では清祀といい、周では大蜡といい、漢で

は臘と改める」とある。臘は獺であり、(孟冬十月) 田獺に出て獲た禽獣を先祖の廟に供えて祀る礼である。別説では「臘」は「接」であり、(歳末に) 新旧の歳が交接するので、飾りたてて大祭を行い、歳月の運行の功德に報いる礼であるという。漢は火行で、戌(金行)に衰退するので、戌の日に臘祭をする。(このように孟冬の祭、歳末の祭との二説ある。)

13 祖

謹按、『禮傳』(1)「共工之子曰脩，好遠遊，舟車所至，足跡所達，靡不窮覽，故祀以爲祖神(2)。」祖者，祖也。『詩』云「韓侯出祖，清酒百壺(3)。」『左氏傳』「襄公將適楚，夢周公祖而遣之(4)。」是其事也。『詩』云「吉日庚午(5)。」漢家火行(6)，盛於午，故以午祖也。

〔注〕

(1)『玉函山房輯佚書』は荀爽『禮傳』に「殘本風俗通卷下」より「共工之子曰脩，好遠遊，舟車所至，足跡所達，靡不窮覽，故祀以爲祖神」を載せる。

(2)『後漢書』朱景王杜馬劉傳堅馬列傳「建武四年，(馬成)拜揚武

將軍，：時帝幸壽春，設壇場，祖禮遣之。」李賢注「應劭風俗通曰

『謹案禮傳，共工氏之子曰脩，好遠遊，舟車所至，足跡所達，靡不窮覽，故祀以爲祖神。祖，祖也。』同鄭孔荀列傳「(荀爽)於是飲藥而卒，時年五十。帝哀惜之，祖日爲之廢讌樂。」李注「祖日謂祭祖神之日，因爲讌樂也。風俗通曰『共工氏子曰脩，好遠遊，祀以爲祖神。漢以午日祖。』『史記』五宗世家「臨江閔王榮，：：上徵榮。榮行，祖於江陵北門。」索隱「按，祖者行神，行而祭之。故曰祖也。

風俗通云『共工氏之子曰脩，好遠遊，故祀爲祖神。』又崔浩云『黃帝之子累祖，好遠遊而死於道，因以爲行神。』亦不知其何據。蓋見其謂之祖，因以爲累祖，非也。據『帝系』及本紀皆言累祖黃帝妃，無爲行神之由也。又聘禮云『出祖釋軾，祭酒脯』而已。按，今祭禮，以較壤土爲壇於道，則用黃牴或用狗，以其血鬻左輪也。『宋書』律曆志中「崔寔『四民月令』曰「祖者，道神。黃帝之子曰累祖，好遠遊，死道路，故祀以爲道神。』」

(3)『詩經』大雅韓奕「韓侯出祖，出宿于屠。顯父餞之，清酒百壺。」疏「此言韓侯既受賜而將歸，在道餞送之事也。言韓侯出京師之門，爲祖道之祭。」

(4)『春秋左氏傳』昭公七年「(楚)的靈王が章華台の落成式に昭公を招待した。」公將往，夢襄公祖。梓慎曰「君不果行。襄公之適楚也，

夢周公祖而行。今襄公實祖，君其不行。』子服惠伯曰『行。先君未嘗適楚，故周公祖以道之。襄公適楚矣，而祖以道君。不行何之。』三月公如楚。」

(5) 『詩經』小雅吉日「吉日庚午，既差我馬。」毛傳「外事以剛日。差，擇也。」疏「毛以爲王以吉善之日，庚午日也。」

(6) もと「火行」二字無し。吳樹平、『後漢書』郭陳列傳「(陳)咸父子相與歸鄉里，閉門不出入，猶用漢家祖臘。」李注「應劭『風俗通』曰『共工之子好遠遊，死爲祖神。漢家火行，盛於午，故以午日爲祖也』」等に拠り補う。

〔訳〕

(祖祭について) 謹んで考察いたします。『禮傳』に「共工の子脩は遠遊を好み、舟や車がいける所、足で到達できるところはすべて出かけて行き自分の目で見た。そこで彼を祖神として祀った」という。「祖」とは「祖(行く)」である。『詩經』大雅韓奕に「韓侯は京師を出で祖を祀り、清酒は百壺(韓侯は都を退出するに当たって祖を祀り、都の外の厩に宿泊した。周の大夫らは清酒百壺を餞に贈った。)」とある。『春秋左氏傳』昭公七年に「襄公が楚に旅立つ前、周公が祖を行い送ってくれる夢をみた」とある。これらが「祖祭」の事である。

『詩經』小雅吉日には「吉日の庚午」とある。漢家は火行であるから、午の日に最盛となる。そこで午の日に祖祭をする。

14 禊

謹按、『周禮』「男巫掌望祀、望衍、旁招以茅(1)。女巫掌歲時以祓除、鬻浴(2)。」禊者、潔也(3)。春者、蠱也、蠱蠱搖動也(4)。『尚書』「以殷仲春，厥民析(5)。」言人解析也。療生疾之時，故於水上鬻潔之也(6)。巳者、社也(7)，邪疾已去，祈介社也。

〔注〕

(1) 『周禮』春官宗伯下「男巫，掌望祀、望衍授號，旁招以茅。」鄭注「杜子春云『望衍，謂衍祭也。授號，以所祭之名號授之。旁招以茅，招四方之所望祭者。』」玄謂衍讀爲延，聲之誤也。望祀謂有牲粢盛者，延，進也。謂但用幣致其神。二者詛祝所授類造攻說禴禘之神號，男巫爲之招。」

(2) 春官宗伯下「女巫，掌歲時祓除、鬻浴。」鄭注「歲時祓除，如今三月上巳如水上之類。鬻浴，謂以香薰草藥沐浴。」『後漢書』禮儀志上「是月上巳，官民皆絜於東流水上，曰洗濯祓除去宿垢疢爲大絜。」

絮者、言陽氣布暢、萬物訖出、始絮之矣。」劉昭注「謂之禊也。風俗通曰『周禮、女巫掌歲時以祓除疾病。禊者、絮也。春者、蠶也。蠶蠶搖動也。尚書、以殷仲春、厥民析、言人解析也。』」

(3) 『文選』顏延年「三月三日曲水詩序」李善注「風俗通曰『周禮、女巫、掌歲時祓除疾病。禊者、絮也。於水上盥絮也。巳者、祉也、邪疾已去、祈介祉也。』」

(4) 『禮記』鄉飲酒義「賓必南鄉。東方者春、春之爲言蠶也。產萬物者聖也。」鄭注「春、猶蠶也。蠶動、生之貌也。聖之言生也。」

(5) 『尚書』堯典「日中星鳥、以殷仲春。厥民析、鳥獸孳尾。」孔傳「日中、謂春分之日。鳥、南方朱鳥七宿。殷、正也。春分之昏、鳥星畢見、以正仲春之氣節。轉以推季、孟、則可知。冬寒無事、並入室處。春事既起、丁壯就功。厥、其也。言其民老壯分析。乳化曰孳、交接曰尾。」

(6) 『文選』王元長「三月三日曲水詩序」善注「禮傳曰『禊者絮也。仲春之時、於水上擗絮也。』」『拾補』はこの下に「日用上巳」を補うと下文につながるという。

(7) 『說文解字』「巳、已也。四月易氣已出、陰氣已臧、萬物見、成彰彰。」

〔訳〕

(禊について) 謹んで考察いたします。『周禮』春官宗伯下に「男巫は望祀と望衍(四方の神々を祀り、呼びかけて招く)を担当し、女巫は毎年三月上巳の日に祓除(病気のお祓い)と鬻浴(香草を用いる沐浴)を担当する」とある。「禊」とは「潔(清潔)」である。「春」は「蠶」であり、万物が蠢めき躍動する季節である。『尚書』堯典に「正に仲春になると、民はおのおのに析れる」とあるが、それはそれまでこもっていた家からでて、おのおのの持ち場に分かれて農事に従事することをいう。また春は病気を予防する時でもある。そこでそれまでにたまった垢を水辺で洗い流し、薬草をすりつけて身を清潔にするのである。(三月上巳の日にこの祀をするのは)「巳」は(已であり、止に通じ)、「祉(幸い)」に通じるからである。邪疾を去らせ、大きな祉を祈るのである。

15 司命

謹按、『詩』云「芄芄棫樸、薪之樵之(1)」。『周禮』「以樵燎祀司中、司命(2)」。司命、文昌也。司中、文昌下六星也(3)。樵者、積薪燔柴也。今民間獨祀司命耳、刻木長尺二寸爲人像、

行者檐篋中、居者別作小屋。齊地大尊重之、汝南諸郡亦多有、皆祠以豬、率以春秋之月(4)。

〔注〕

(1) 『詩經』大雅棫樸「芄芄棫樸、薪之標之。」毛傳「興也。芄芄、木盛貌。棫、白松也。樸、枹木也。標、積也。」鄭箋云「白松、樸、棫屬而生者、枝條芄芄然、豫斫以爲薪。至祭皇天上帝及三辰、則聚積以燎之。」釋文「芄、薄紅反。標音酉、七九反、云積木燒也。」

(2) 『周禮』春官宗伯「大宗伯之職、掌建邦之天神、人鬼、地示之禮、以佐王建保邦國。以吉禮事邦國之鬼神示、以禋祀祀昊天上帝、以實柴祀日月星辰、以標燎祀司中、司命、鬯師、雨師。」鄭注「禋之言煙、周人尚臭、煙、氣之臭聞者。標、積也。詩曰『芄芄棫樸、薪之標之。』三祀皆積柴實牲體焉、或有玉帛、燔燎而升煙、所以報陽也。鄭司農云『：：司中、三能三階也。司命、文昌宮星、：：』玄謂：：司中、司命、文昌第五、第四星、或曰中能、上能也。」

(3) 以上十三字、もと「文昌也司中文昌上六星也」に作る。『拾補』は「司中、文昌五星也、司命、文昌四星也」に改めるが、孫詒讓『札迻』はそれを鄭玄説に基づく誤りとし、鄭司農説に基づいて「司命、文昌也。司中、文昌下六星也」とすべきという。吳樹平、王利器ともにこれに従う。注(2)参照。文昌宮は北斗七星のひしや

くの先にある三日月形の六星からなり、大熊座の首から胸にあたる。司中(三能三階)は北斗七星と文昌宮の下にある、二つずつ三組ならんだ六星、大熊座の脚にあたる。三臺ともいう。

(4) 『後漢書』祭祀志中、劉昭注「風俗通曰『周禮、以爲標燎、祀司中、司命。司命、文昌上六星也。標者、積薪燔柴也。今民猶祠司命耳、刻木長尺二寸爲人像、行者置篋中、居者別作小居。齊地大尊重之、汝南諸郡亦多有者、皆祀以豬、率以春秋之月。』」

〔訳〕

(司命について) 謹んで考察いたします。『詩經』大雅棫樸に「芄芄と茂る棫の木と樸の木、これを薪にし標(積)む」とある。『周禮』春官宗伯に「(大宗伯は)標燎し(薪を積んで焼き煙を立ち上らせ)司中と司命などを祀る」とある。「司命」とは「文昌宮星」で、「司中」は「文昌宮」の下にある六星である。「標」は薪を積んで燔柴することである。今民間では司命だけを祀る。長さ一尺二寸の木に人像を彫刻し、旅人は行李の中に入れて担いで持ち歩き、家居する者は別に小屋を作つて安置する。齊の地ではたいそうこれを尊重し、汝南などの諸郡にも祀る人が多くあり、皆祠を作つて子豚を供える。率ね春と秋に祀る。